

趣味

かもめ7440

(*Hah...*) キラ キラ キラ...

ララ ララ ララ...

ぼくは、心の異常な軽やかさだけを感じながら、

大きく展がってゆく…。この世界の秘密。

毎朝数を増やしてゆく、花。one hand sword...

水のようにあり余っている、酸素の匂い。いくつもの、無垢な礎。方向感覚の座標軸が一瞬にして消失。

(拡大してゆく——圓い、すべすべした幹から..)

蜜の味、歓喜、美しく熟した果物。

静謐な花骸...

樹々の梢が曇り空にほとんど裸の枝をつきだしているのを、

見つめていた。じわっと——情けない想いが... ママレードみたいに——

ぐしゃっと..潰れるんだ——。 *close to you...*

静謐な花骸...

コンタクト

接触。

I think I've fallen in love with you.

with you.

with you.

I love you...

世界は音楽の恐ろしい休符記号。

(壺のような穴に――誇るに足らない無価値を搾る…)

回転するビールの缶や、インスタント食品。煙草の吸殻。

世界は時間の海を渡って、貝殻のようにびたりとかたく蓋をした。

そうすると――自分自身の姿勢や体の傾きがわからなくなる ……んだ――。

修道院 の内部 のような、 海底 に沈んだ、裸な、不意 …。

どうして――陽の光が射さないだろう…

(だろう…。)

アルペツジオのように、花がひっそり蕾でもひらいている抒情。

ざわざわとぼくの内側でなにかえたいの知れないものが動き出し、

いてもたってもいられないような、妙に落ちつかない気持ち…。

やさしく爪弾かれる月の光、宇宙の光、まだ見えぬ青空におぼるる…。

周囲に建物も道もない。方向感覚がなかなか記憶と一致しない。

「パトカーや公用車両の駐車場…」

突然、虚しさに襲われた僕は夕暮れの弱いうすぐらい谷間に追い込まれる。

分かれ道はたくさんあり、ところによっては人が一人通れるほどの狭いトンネル。

そんな時だ。何事も慎重に運んだ方がいい。そう思う。後ずさりに突進する非常ドア。

視界を移動させた時、さっきと同じ顔がまた現れる。

だれもない方向へと手を突き出している。

一瞬の忘我は罪のように深い。

「死にたくないか」

(わからない――)

(わからないはずがあるか…)

、、、、
そう言った。

、、、、、、
でも本当なんだよ——。

(しっぽりと水をふくんだ——海綿を胸にいだいている。)

、、、、、、
膚に残しゆく、声のない叫び、純情——は、波のように風になびき、

ノスタルジア

限りない旅愁…。死んだ細胞は、夜の微風にゆらいでいる草のようだ。

(強固な降着装置、アレスティング・フック、折りたたみ式の主翼)

瞬間的にはあるが方向感覚と距離感が狂わされてしまう高層マンションの最上階。

愛が、豊かで穏やかな水のようにぼくを呑みこむ。

(だろぅ…。)

頭の芯の中で——。

I think I've fallen in love with you.

with you.

with you.

I love you…

——あらゆる方向感覚を失っていたことに気づいた。

月はまだ輝いていたが、雲の塊りが星の大部分を隠していたが。